



とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）の視点を踏まえた授業づくりのポイント



とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期） R5～

確かな学力

問題発見・解決能力の育成

とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）では、「問題発見・解決能力」の育成を目指し、「子供の問題（課題）意識を高める」「子供が自己調整しながら学習を進めることができるようにする」の二つの視点を基に授業改善に取り組むこととしています。どのような子供の姿を目指して授業づくりに取り組めばよいか、これまでの授業を見つめ直してみましょう。そして、学習者中心の授業づくりに向けた取組を進めていきましょう。

【授業改善の視点】

視点1 子供の問題（課題）意識を高める

＜教師の手立て（例）＞

- ・導入での事象の提示や学習環境の工夫
- ・既習事項との違いを確認する場の工夫 等



・なぜだろう。
・今までと違うぞ。どうしてだろう。
・できる、分かるようになりたい。もっと知りたい。

視点2 子供が自己調整しながら学習を進めることができるようにする

※自己調整：課題解決の過程で、自分の学習状況を把握し他の子供と話し合うなどして、方向性を見直したり、必要な内容等について考えたりすること 等

＜教師の手立て（例）＞

- ・活動の見通しをもたせる工夫
- ・情報を収集・選択し、考えをもたせる工夫
- ・一人一人の問題解決に生きる対話の工夫
- ・考えを分かりやすくまとめ、表現させる工夫
- ・自己の活動を振り返らせたり、身に付いたことを自覚させたりする場の工夫 等



・〇〇してみよう。次は△△していけばよさそうぞ。
・ここは、まだよく分からないから調べよう。
・みんなは、どう考えたかな。聞いてみたいな。
・みんなに言いたいことが伝わるかな。
・ここまで分かったぞ。次は、□□してみよう。

・学びに向かう力の高まり

・自己肯定感の向上

家庭学習へのつながり

・もっと考えたい。
・あきらめないでよかった。また、がんばろう。



・もう1回やってみよう。
・難しいかもしれないけれど、挑戦しよう。

各学校による主体的な学力向上の取組の推進（Ⅱ期） PDCAサイクル H25～R4

I 期を根底に置く

学力の向上と人間関係づくりを一体的に進める「学び合い」（Ⅰ期）H20～H24
実感を持った理解につながる「体験」の重視

＜授業改善の視点＞

○ねらいを明確にした授業の構想 ○目的を明確にした書く活動 ○終末における学習成果の確認

＜問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿の例＞

問題発見・解決能力を身に付けていく子供の姿は、必ずしも以下の順にみられるわけではありません。学習の状況に応じて繰り返しみられたり、行き来したりすること考えられます。

興味・関心をもつ

- ・心が動く（感動、驚き等）
- ・疑問を感じる



課題を見いだす

- ・気付く
- ・ずれを感じる
- ・追究したくなる問いまで高める



課題解決への見通しをもつ

- ・目当てをもつ
- ・ゴールをイメージする
- ・進め方を考える



考え、判断し、解決していく

- ・自分事として捉える
- ・比較、関連付ける
- ・試行錯誤し、自らの学習を深める
- ・考えをまとめ、伝え合う



まとめと振り返りをする

- ・課題に対する学習内容をまとめる
- ・学び方を振り返る
- ・身に付いた力に気付く
- ・新たな気付き、見通しをもつ



＜教師の具体的な手立ての例＞

目指す子供の姿に向けて単元を構想する

- ・子供に身に付けさせたい資質・能力の確認
- ・子供の実態、教師の願い、教材の特性を意識した全体計画の作成
- ・指導事項を踏まえた評価場面の位置付け

子供が課題をもつための場や環境を設定する

- ・引き出した問いや願いから、子供自らが追究したくなる課題づくりへの後押し
- ・学習への期待感を高める事象の提示や学習環境づくり

単元を通して、子供の問題（課題）解決の意識の持続・向上を図る

- ・授業で扱う材料や用具等の工夫、場所や時間の柔軟な設定
- ・子供のつまづきを想定した複数の手立ての準備
- ・既習事項との違いに気付かせる発問や板書計画づくり

子供が主体となって学び進めるための場や機会を設ける

- ・子供が追究に応じて選択できる、教材、方法、進め方等の工夫
- ・子供が必要なときに、必要な相手と対話したり、協働したりできる場面の設定
- ・収集した情報を整理・分析し、まとめ・表現する機会の充実

子供一人一人の学びの状況を把握する

- ・問題解決の見通しや目標への学びの状況の見取りと声かけ
- ・端末やノート等で子供の考えの確認

子供が成果や課題を自覚するための視点や場を設ける

- ・振り返る観点・視点の明確化
- ・子供が次の活動の見通しをもつための振り返りの活用

学びの土台

幼児期から育む非認知能力※の例

自分を高める力

意欲、好奇心、創造性等

自分と向き合う力

自己肯定感、自制心、やり抜く力等

他者と関わる力

コミュニケーション力、協調性、思いやり等

※非認知能力とは、学力テスト等で数値化しにくい、内面的なスキルや特性を指します。